

《インタビュー》

三谷太一郎氏インタビュー記録

— 「大正デモクラシー」研究をふり返る —

田澤晴子
平野敬和
藤村一郎

解説

本稿のもとになった聞き取りは、2016年11月4日、田澤晴子・平野敬和・藤村一郎の質問に対して、三谷太一郎氏が答えるという形で行われた。田澤・平野・藤村の3名は、2014年4月に、「大正デモクラシー」の再検討を戦後思想史の読み直しと関連させる研究会を立ち上げた。その活動の柱の一つに、「大正デモクラシー」研究を進めてきた研究者に対するインタビュー調査がある。「大正デモクラシー」研究は、戦後の思想史学のなかで最も重要な領域の一つであり、これまで多くの業績が積み重ねられてきた。インタビュー調査を通して、研究者の思想的背景と研究が進められた時代状況に関する理解を深めることは、戦後思想史の成果と課題を検討するうえで大いに役立つ。三谷氏への聞き取りは、その第2回として行われた。なお、第1回として行われた松本三之介氏への聞き取りは、田澤晴子・平野敬和・藤村一郎「松本三之介氏インタビュー記録——日本政治思想史をふり返る」として発表した（本誌第47巻第4号、2018年2月）。

三谷太一郎氏は1936年岡山市生まれ。1960年東京大学法学部卒業。現在、日本学士院会員、東京大学名誉教授。「大正デモクラシー」研究を牽引してきた研究者の一人である。三谷氏の研究は、日本政治外交史研究において、内政と外交、政治と思想といった異なる次元の相互作用を分析し、その見取り図を描き出すという視点を導入したこと——「大正デモクラシー状況」という概念を導入した点に特徴がある。著書には、『日本政党政治の形成——原敬の政治指導の展開』（東京大学出版会、1967年）、『大正デモクラシー論——吉野作造の時代とその後』（中央公論社、1974年）、『近代日本の司法権と政党——陪審制成立の政治史』（塙書房、1980年）、『二つの戦後——権力と知識人』（筑摩書房、1988年）、『近代日本の戦争と政治』（岩波書店、1997年）、『政治制度としての陪審制——近代日本の司法権と政治』（東京大学出版会、2001年）、『ウォール・ストリートと極東——政治における国際金融資本』（東京大学出版会、2009年）、『学問は現実に関わるか』（東京大学出版会、2013年）、『人は時代といかに向き合うか』（東京大学出版会、2014年）、『戦後民主主義をどう生きるか』（東京大学出版会、2016年）、『日本の近代とは何であったか——問題史的考察』（岩波書店、2017年）

などがある。

このインタビューは、三谷氏が研究を志した時期の話に始まり、原敬研究から吉野作造研究へと展開した際の問題関心について述べる。そして、「大正デモクラシー」の位置づけをめぐる、「戦時体制」、「戦後民主主義」との関係をもどのようにとらえるのかという問題に続いている。また、岡義武、丸山眞男といった研究者との交流にも触れる。その内容は、「大正デモクラシー」研究の成果と課題を考えるうえで、貴重な資料となるであろう。本誌に掲載した理由として、松本三之介氏への聞き取りと同様、このインタビューの編者が所属する同志社大学人文科学研究所第19期（2016～2018年度）第8研究の研究課題「転換期のデモクラシー——『戦後民主主義』に関する歴史的・理論的研究」との関わりがある。その研究は「戦後民主主義」を近代日本の民主主義の展開のなかに位置づけることを課題としており、このインタビューの編集はその研究の成果の一部でもある。なお、注記はできる限り少なくし、〔 〕で括って本文中に挿入した。長文にわたるものは、最後にまとめた。

今回の掲載にあたり、三谷氏はインタビュー原稿に丹念に目を通して、確認をしてくださった。そのうえで、掲載を許可してくださった三谷氏に対して、厚くお礼申し上げる。

(平野敬和)

1 東京大学法学部での学問体験について

【藤村】岡義武先生（1902-1990）のゼミでの学問体験や、岡先生の印象、三谷先生が受けた影響などをお聞かせいただけますでしょうか。幸徳秋水（1871-1911）をゼミで読まれたと聞いておりますが、このことについて詳しくお聞きしたいのです。

【三谷】それはちょっと、お聞き間違いだと思います。私がいったのは、岡先生が戦争中、昭和18年か19年〔1943年か44年〕に幸徳秋水を読まれたという意味です。石本恵吉男爵（1887-1951）と結婚した加藤シヅエさん（後の日本社会党代議士、1897-2001）のご次男（石本民雄、1918-1943）が、東大で岡先生のゼミで幸徳秋水を担当して報告したということがあったようです。当時岡ゼミは東大法学部のなかでは、学生間では「人民戦線」と呼ばれるような最も進歩的なゼミでした。戦後の岡先生のイメージとは、やや違っていたようです。そのゼミには、当時の戦争に批判的な学生たちが集まっていたようです。先生ご自身、戦争に対しては終始明確な反対の態度を貫かれ、当然のことながら、時には深い孤立感をもたれることもあったようです。そのような態度が戦争末期には危険を冒して、南原繁先生（1889-1974）らを中心とする東大法学部七教授のいわゆる終戦工作への参加に結びついたと思います。戦中の岡先生の戦争に対する厳しい批判的態度については、私は先生ご自身からよりも、主として当時助教授であった丸山眞男先生（1914-

1996)から聞いたことが多かったのです。岡先生は、戦中の先生の反戦的態度については、自ら語られることはありませんでした。そのことが岡先生に対する私の尊敬の念をますます深めました。敗戦直後、労農派と呼ばれた社会主義者の向坂逸郎氏(1897-1985)が岡先生を訪ねてきて、共に行動してほしいと要望されたと先生から伺ったことがありました。そのとき向坂氏は、岡先生に対して、「あなたのような自由主義者とは提携できると思っているのです」といったそうです。まさに「人民戦線」の発想ですね。先生は戦中、幸徳についても何の違和感もなく、ゼミの教材に取り上げ、読んでいたということです。

ついでに申しますと、戦中のゼミで幸徳について報告した石本民雄氏に先生は深く嘱望しておられました。教授時代に接した学生たちのなかで「最も印象に残った学生だった」といっておられました。石本氏は早逝されましたが、その墓石に刻まれた石本氏の墓標は、先生が加藤シヅエ氏の依嘱によって書かれたものと聞いています。上野の谷中墓地にある石本家の墓域には、明治44年から45年〔1911年から12年〕にかけて第二次西園寺内閣の陸軍大臣(上原勇作陸軍大臣の前任大臣)を務めた祖父に当る石本新六陸軍中將(1854-1912)の大きな墓とともに、岡先生の書体を刻した石本民雄氏の小さな墓も置かれていましたが、近年整理されたようで、今は見当たりません。

【藤村】岡義武編『吉野作造評論集』〔岩波書店、1975年〕に関わられましたか。

【三谷】岡先生の『吉野作造評論集』は資料的な面ではお手伝いしました。逆に私が編纂した中央公論社版の『日本の名著・吉野作造』〔三谷太一郎編、中央公論社、1972年〕では「月報」で対談をさせていただきました。

【藤村】日本政党政治研究を志した契機、問題関心、当時の学界状況についてご教示いただけますでしょうか。

【三谷】私は大学3年生のとき篠原一先生(1925-2015)のゼミに所属していて、当時先生のご関心のテーマだったのか、精神分析と政治学という題で、アメリカの政治学者の書いた英文論文を講読し報告しました。岡先生のゼミでは『近代日本の政治家』〔岩波書店、1979年〕に出てくる人物を取り上げました。先生はこの内容で今の天皇陛下(明仁天皇、1933-)の皇太子時代にご進講をされており、私の学部学生時代に、ドイツ語で、「今、『クロンプリッツ(Kronprinz)』のところで講義をしている」といっておられました。当時の私には全く遠い存在であった皇太子のことを「クロンプリッツ」とドイツ語でいわれたので、一瞬理解できなかつたことを記憶しています。その内容が最初に文藝春秋社から出た単行本です。ゼミでは先生から犬養毅(1855-1932)を担当せよと指示されて、報

告しました。図書館に行き参考資料を読んでノートにとりました。そのときノートしたのは、鷺尾義直編『犬養木堂伝』〔木堂先生伝記刊行会編、全3巻、東洋経済新報社、1938-39年〕、鶴崎（鷺城）熊吉『犬養毅伝』〔誠文堂、1932年〕などでした。私にとっては、そのときの犬養研究が政党政治家の研究のはじめです。犬養は私の生まれた岡山県の出身であり、私の祖父は岡山県の主要産品であった花筵の卸問屋を営んでおり、その業界の組合組織の責任者でもあったので、犬養毅やその長男犬養健（1896-1960）の選挙運動にも関わったようです。ゼミではいろいろな政治家が取り上げられましたが、犬養は幕末の外国奉行の栗本鯤（鋤雲）（1822-1897）を尊敬しており、その関係で栗本にも関心を持ちました。またゼミで成島柳北（1837-1884）の『柳北全集』〔博文館、1897年、死後にまとめたもの〕も取り上げられました。これは佐藤誠三郎氏（1932-1999）が岡先生から指示されて担当し、立派な報告をしました。

こうして『郵便報知新聞』や『朝野新聞』など、明治初年のジャーナリズムを担った幕臣出身の人たちに関心を持ちました。そしてその反藩閥的な政治的役割について知るきっかけとなったのです。成島は立憲改進黨に入党し、栗本も入党はしなかったものの、政治的立場は立憲改進黨でした。そこで明治初年のジャーナリズムこそは、日本の政党の源流だという認識を持ちました。同じように原敬（1856-1921）もジャーナリズムに関係していましたから、犬養、尾崎（行雄）（1858-1954）、原らは明治初年のジャーナリズムのなかから政治家としての出発点を得たということに関心を持ちました。これが私の日本政党政治研究への一つの動機といえます。

【藤村】吉野作造（1878-1933）研究をはじめた契機についてお聞きします。ご高著『大正デモクラシー論——吉野作造の時代とその後』「あとがき」¹⁾で「権力の世界」に対する「非権力の世界」への関心を明示しておられますが、先生の研究上のご関心のなかで吉野へ研究を展開させた意図について、より詳しくご教示いただけますでしょうか。

【三谷】吉野に対する関心をもったのは、一つの私的動機があります。大学4年生のときに「大学に残り広く政治学を研究したい」と父三谷堅志（東大法卒、弁護士、1908-1987）にいったところ、「政治学で将来生活していくのは難しいのではないか」といわれました。そうかもしれないとは思いましたが、仮に反対されても研究者の道に進みたいと思っていました。その際「どういうことを研究したいのか」と聞かれたので、「実は日本政治史を研究したい」というと、「それは吉野作造さんがやっていたあの講義のようなものか」と聞かれ、「その通りだ」と答えました。

父は昭和4年〔1929年〕に岡山の旧制六高から東大に入学してすぐ吉野先生の講義に

出たらしいのです。法律学科の学生でしたので本格的に研究するというのではなく、有名な先生の講義だというので聴いたらしいのです。そして「あの吉野先生の講義は面白かったなあ、ああいう研究をやるなら将来面白いかもしれないな」といましてね、それでそっちのほうに行ってみるかというのが出発点でした。父は弁護士だったので、私も最初はその道を考えていましたが、だんだんと法律実務から関心が遠のき、別のほうに行くことになりました。私は学問としては法学は嫌いではありませんでしたが、法律実務は好きになれませんでした。

【藤村】東大法学部を志望した理由についてお聞かせください。

【三谷】父の職業である弁護士をつごうという考えはありました。私は高校生当時、千葉市に住んでおり、父の使いで時折書類を千葉地方裁判所に届けに行き、裁判所の書記官に書類の不備で、よくどなられていました。裁判所の雰囲気は、あまり好きにはなれませんでした。大学に入ってからは、経済学部に行こうと考えたこともありました。これには大学に入ってから比較的よく読んだマルクス主義文献の影響もあったと思います。ただ私の関心は、マルクス主義理論というよりは、中国革命史に特化しており、竹内好（1910-1977）の影響を強く受けました。大学入学後直ちに歴史研究会という大きな研究サークルに入りましたが、そのなかの中国革命史研究会に属していました。

【藤村】原敬研究から吉野研究へ展開させた意図はどのようなものですか。

【三谷】原から吉野への研究の展開は、両者を同じ視野にとらえるコンテクストを設定することが必要なのではないかと考えたことが発端です。私が研究者修業を始めた当時（1960年代初頭）、両者を同じコンテクストで位置づけるということはありえないと考えられた時代でした。この点についてはいろいろな方面で批判されました。しかし私は原と吉野とを切り離すのではなく、関連づけることが、日本の政治的近代の理解にとって必要だと考えたのです。そのために「大正デモクラシー状況」という未熟な概念を強引に導入することを試みて、そのような状況を構成する要因（promoting factor）として原に代表される「権力の世界」、および吉野に代表される「非権力の世界」という配置を設定したのです。同じ状況のなかから一方で権力の主体としての政党と他方でそれを批判する大正デモクラシー運動が生れたこと、つまり政治におけるプロフェッショナルとアマチュア、両者を同一の文脈のなかでとらえることが吉野研究に向かった私の動機といえます。つまり私の問題意識では、原だけでなく、吉野もまた政治史のなかに位置づけることになったわけです。

また、私自身の吉野研究の発端は、あとでふり返ってみると吉野の明治文化研究にあ

ります。これは当時、重要性を認められず、研究対象としてはほとんど取り上げられていなかったのです。しかし私は思想家としての吉野を究明するうえで重要な分野ではないかと考えたのです。それが吉野にとってなぜ必要であったのか、思想家の吉野にとって何を意味するのか、吉野の思想の全貌をとらえる場合に、一見何事でもないように見える明治文化研究が重要な問題だと考えたのです。つまり吉野には、明治史研究を通して「民本主義」の再根拠づけ（その歴史的必然性の証明）を行うという深い政治的モチベーションがあったんじゃないかと思います。

【田澤】吉野の思想を研究されるにあたり、松本三之介先生（1926-）、松尾尊兌先生（1929-2014）の研究をどのようにご覧になっていましたか。1960～70年代における吉野に対する政治学界の反応や認識はどのようなものだったのでしょうか。

【三谷】最初に吉野に関心をもったのは、田中惣五郎（1894-1961）の『吉野作造』〔未來社、1958年〕に感銘を受けたことです。これは、今でも古典的名著だと思います。松本先生の研究は、吉野を政治思想史のなかに位置づけた最初のものではなかったかと思います。先生の『国学政治思想の研究』〔有斐閣、1957年〕におけるアプローチをそのまま吉野に振り向けたというものです。松本先生は思想家としての吉野研究の先駆者で、鬼面人を驚かすというのではなく、一見平凡で、真っ当な方法がむしろ新鮮でした。

私どもが研究を始めたころはその方面の研究はなく、むしろ極端にいえば吉野に独創的な政治思想があるのかという、そんな印象がありました。吉野研究に学問的意味があるのかという受け止め方がむしろ主流で、過去の人物というイメージが強かったし、一般の研究者もそうだったと思います。

松尾尊兌さんについては、一番印象に残っているのは同時代の中国についての吉野の研究を正面から取り上げたということ、松尾さんらしい綿密な実証的裏付けを吉野研究に与えたことに大きな意義があり、感銘を受けました。私も吉野の中国論について書こうと思っていましたので、むしろ先を越されたという感じです。松本・松尾のお二人の研究が出る前は、吉野は忘れられた過去の存在でしたが、それぞれ吉野のある側面を取り上げただけでなく、吉野研究を通して「大正デモクラシー」研究の意義を明らかにしたという点で、お二人のそれぞれの研究には意味があったと思っています。

【田澤】松尾さんとの交流はありましたか。

【三谷】全然なかったです。松尾さんは最初に私が出した本『日本政党政治の形成——原敬の政治指導の展開』〔東京大学出版会、1967年〕の書評を『週刊読書人』に書いてくださり〔松尾尊兌「書評 三谷太一郎著『日本政党政治の形成』』『週刊読書人』1967年6

月26日)、正直なところ松尾さんとは学風も違うので厳しい批判を覚悟していましたが、非常に好意的な書評でしたので安堵しました。東大正門前にある書店で『週刊読書人』を探して、店頭で読みました。逆に大先生の井上清さん(1913-2001)からは酷評をいただきました。民主主義科学者協会の機関誌に「『転換期』(一九一八—一九二一年)の外交指導——原敬及び田中義一を中心として」〔篠原一・三谷太一郎編『近代日本の政治指導 政治家研究第2』東京大学出版会、1965年〕について書評を書いてくださったのですが、意外なほどの酷評でした。「五四運動時代の中国人がジョン・デューイ(1859-1952)に影響を受けた」ということを書きましたら、「三谷とかいう人は、アメリカ帝国主義に媚態を呈するものである」などと書かれました(笑)。あとで松尾さんにお会いしたとき、「あれは井上さんのほうがどうかしていたと思うよ」といわれまして、それ以来松尾さんとは親しくしました。お互いアプローチは違いますが、私は学者として、人間として深く尊敬しています。

【田澤】米騒動と大正デモクラシーの関係をどのようにお考えですか。

【三谷】松尾さんの論文集『大正デモクラシー期の政治と社会』〔みすず書房、2014年〕にある通り、松尾さんは米騒動や創立期の共産党の実証的裏付けについては抜群だと思えます。しかし私は大正デモクラシー運動を米騒動から出発させるということについては賛同できなかった。米騒動と大正デモクラシーの有機的関連については疑問を感じざるを得ない。信夫清三郎先生(1909-1992)の『大正政治史』〔勁草書房、1968年〕も米騒動から論じており、私はこのことに失望し、この本は逆モデルとなりました。信夫先生にはついていけないと思った経験がある。米騒動を大正デモクラシーの出発点とするものの十分な理由や根拠づけが必要ではないかと思いました。米騒動というのは、方向をもたないアナキー志向なのですね、それはデモクラシーとは違うんです。なぜあれが大正デモクラシーの出発点なのかという問題を考える必要がある。デモクラシーは本来一つの権力形態であり、統治体制(government)であって、アナキーとは違うのです。デモクラシーを貴族政や君主政との対比において、governmentとしてとらえる視点が必要だと思えます。もちろん米騒動が結果として寺内内閣を倒し、政党内閣への道を開いた破壊的意義は認めるべきですが、それは、デモクラシーの前段階としてのアナキーをもたらしたととらえるべきだと思っています。

【藤村】岡義武の吉野観についてはいかがでしょうか。

【三谷】岡先生は人間吉野への深い尊敬をもっていました。あるとき岡先生に「吉野先生はどのような人でしたか」とお聞きしたところ、「玲瓏玉の如き人」、つまり玉のように一

点の曇りのない人ということを強調されました。これが今でも印象に残っています。

いろんなエピソードを聞きましたけれども、(そのなかの一つは) 当時は大学に教官食堂というものがあり、各学部のスタッフが食事をしていました。法学部の人たちは食堂に入って最初のテーブルに座ることになっていました。吉野先生は岡先生などの若い人に大変人気があり、いつも教官食堂の中心にいました。吉野先生は食堂に行くと、どこでもいい、ちょっと入れてくれという風に若い人たちの間に割り込んで座り、話がとにかく面白い。たとえば満州事変などが起こると、その意味について説得的な説明をするのが吉野さんだったらしいです。若い教授会メンバーはおのずと集まって聞いたそうです。法学部だけでなく大内兵衛さん(1888-1980)、矢内原忠雄さん(1893-1961)のような経済学部の教官たちも集まってきて話を聞いたそうです。

また、若い年代だけでなく同年輩の同僚の教官からも信望がありました。教授会のなかで孤立している人も吉野先生には心を開いたということです。そして誰もが吉野先生の「親友」たろうとしました。刑法の大先生の牧野英一さん(1878-1970)は狷介な人で孤立していた人だったのですが、自分は吉野の「親友」だと自称していました。吉野先生が亡くなられた際、周りの人が葬式の準備をしたとき、牧野先生が「自分は吉野の親友だから自分が中心になってやる」といったところ、日本法制史の中田薫先生(1877-1967)が「牧野は吉野の親友だと思っているかも知れないが、吉野の親友は何も牧野一人だけではないんだ」とおっしゃったそうです(笑)。やはり誰からも頼りにされる信望のあった人なんですね。

とにかく研究室の内外を問わず、身分を問わず、誰をも差別しなかったことが大きな特色だったということを岡先生はいわれました。吉野はことばのうえではそれほどラディカルではありませんが、実際の行動の方がよりデモクラティックな面を示していたのです。研究室にいる年取った用務員の人が病気になった際、一緒に病院へ連れて行ったということも聞きました。文章よりも人柄の方がラディカルでした。権威主義とはおよそ遠い人でしたが、誰もが「権威」を認めました。その意味で天性のデモクラティック・パーソナリティであり、またリーダーであったといえるでしょう。赤松克麿(1894-1955)によると、亡くなったあとの追悼文で、「吉野は確かに優れた学者であったが、将来それに比肩しうる学者は出てくるかもしれない。しかしあのような人間はめったに出ない」ということを書いています。それが岡先生から見た吉野先生です。

また、吉野先生は大変よく勉強された方で、亡くなるまで研究室に通っていました。非常勤講師のときに父が講義を聴いたわけですが、体調がよくなかったらしく、「咳が止ま

らず気の毒な感じがした」と父がっていました。吉野先生はまったく気取らない方で、講義のあと、教室に向かって「これから日本橋にタクシーで行くが誰か一緒に行かないか」と呼びかけるなど、なんのてらいもない方だったそうです。

【田澤】明治新聞雑誌文庫はどのような事情により成立したのでしょうか。

【三谷】明治文庫を作ったとき、いろんな人が協力したんですが、当時既に東大を辞めて、非常勤講師を務めていた吉野が事実上の中心にいたというのは大きいですね。初代管理主任の宮武外骨（1867-1955）などはなかなか難しい人だったらしいですが、さすがに吉野先生に対しては無条件で「権威」を認めていたんですね。明治文庫は大正15年〔1926年〕10月に法学部教授会で創設が決定され、最初は今の農学部の一角に作られて、昭和2年〔1927年〕にここ〔明治新聞雑誌文庫所在地〕に引っ越してきて80年以上になります。教授会メンバーでは法制史の中田薫、民法の穂積重遠（1888-1951）らが中心的な支援者でした。きっかけは関東大震災で内務省に納本されていた新聞雑誌が焼けてしまったので、コレクションを作ってちゃんとした建物に置くことが将来的に大事だということで、博報堂が創立20周年記念事業として新聞雑誌のコレクションを作るための基金（15万円）を寄付し、大学の中央図書館に閲覧施設を置く予定にしていたんです。しかし当時の文学部などには明治維新以後の近代の歴史研究や新聞雑誌の資料的重要性について評価が低く、結局法学部が引き取りましようということになり、ここに来たんです。学問的な「見識」とはそういうところに現れるんじゃないでしょうか。

2 「大正デモクラシー」と「戦時体制」、 「戦後民主主義」

【藤村】ご高論「戦時体制と戦後体制」〔三谷太一郎他編『岩波講座近代日本と植民地』第8巻、岩波書店、1993年〕では、戦争が軍事化（非軍事化）や民主化、植民地化、国際化などの戦前体制の変革を促進させてきたという見取り図を示され、「大正デモクラシー」で吉野が唱えた民主化と脱植民地化の方向性が戦後の政治体制として実現したこと、冷戦に伴う「新しい権力国家」の出現によって脱植民地化は凍結され、冷戦後東アジアで問題が噴出するも根本的解決をみていない状況を明らかにしておられます。民主化と脱植民地化という観点から冷戦後の日本はどのようにとらえられるか、またその一層の促進のためにどのような政治的契機が必要であるかをお聞きしたいと存じます。

【三谷】脱植民地化（decolonization）には二面あります。一つは日本にとっての脱植民地帝国化であり、もう一つは旧植民地の政治的経済的自立化です。これら二面の課題の

解決が冷戦後の国際協調（就中旧植民地帝国と旧植民地国家との国際協調）を生み出すための最も必要な条件じゃないかと考えました。この脱植民地化については、植民地研究を積み重ねてこられた方たちには必ずしも意味のある課題とは見られず、一つのテーマとするのに抵抗感があった時代がありました。いわゆる冷戦イデオロギーに代わって、新しい国際社会の攪乱要因となりうる無用なナショナリズム（資源ナショナリズム）を抑えるためにも、脱植民地化は日本にとって取り組まなくてはならない未済の課題です。そのための政治的努力が旧植民地、たとえば北朝鮮をも含めて日本との国際協調関係の確立のためにも必要だと、私は考えているんです。脱植民地化を経て北朝鮮などにもそれぞれの「民主化」が実現されると考えたのです。

吉野の思想は我々よりはるか前の第一次世界大戦後の日本の政治状況のなかで、言葉は使用していませんが、脱植民地化と民主化との二つの課題が不可分だと主張した点で画期的ではないかと考えます。

【藤村】「大正デモクラシー」と「戦後民主主義」の関係についてどのようにお考えですか。

【三谷】ポツダム宣言にある民主主義的傾向の復活強化, という文言の「民主主義的傾向」は、第一次世界大戦後の戦後体制の「民主主義的傾向」（「大正デモクラシー」）を表現していると考えているのです。米国のスティムソン陸軍長官（1867-1950）は戦時中、ポツダム宣言草案中のあのくだりを読んで、若槻礼次郎（1866-1949）や幣原喜重郎（1872-1951）、浜口雄幸（1870-1931）などを思い浮かべ、彼らが「民主主義的傾向」を促進したリーダーたちであり、世界的に見てもそれぞれが遜色ないリーダーだといっています。1945年5月に日本に無条件降伏を促す大統領声明案として起草されたのが後のポツダム宣言案であり、結局そのときは大統領声明としては出なかったのです。アメリカの政府部内で軍関係者を含めて、その声明案を最初に議論したとき、内容はいいが時期尚早だということになり、それは未だ途上にあった原爆開発の完成を待つことになり、声明案の発表は見送られたのです。フランクリン・ローズヴェルト大統領（1882-1945）当時の副大統領のハリー・トルーマン（1884-1972）ですら、原爆開発計画は最重要機密として知らされていなかったんですね。トルーマンはローズヴェルトの死後、大統領に就任してはじめて、原爆開発計画を知らされたのです。原爆投下はのちにその是非がアメリカ国内でも論争となりましたが、反対論者のなかには、原爆開発に巨額の資金が投じられていたことが、その軍事的有用性を検証するために、投下を促したと指摘する論者もいました。

【田澤】第一次世界大戦後の「民主主義」をどのように評価されますか。

【三谷】明治から大正への天皇の代替わりがあってこそ、「民主主義的傾向」が助長されたといえます。民主化は近代日本では天皇の存在感の如何が大きく影響したと思います。「大正デモクラシー」は大正天皇の存在なしにはあり得なかったと思います。重要なのは、天皇の代替わりと第一次大戦の後に原内閣ができたことです。原内閣の画期性とは、衆議院議員が初めて総理大臣になったということにあります。政権交代は単なる政策転換で起こるわけではなく、その背景には政治的価値観の変化があるわけです。三宅雪嶺(1860-1945)は当時、これまで総理大臣が議会において、一人称として「本官」と称していたのが、原になってから初めて「私」に変わるという点を、政治的価値観の変化だと注目しています。1898年に隈板内閣が成立したとき、福沢諭吉(1834-1901)も、これによる政策の変化は大したことはない、政治の価値観が変わることがより重要だといっている。ただ大隈(重信)(1838-1922)・板垣(退助)(1837-1919)の場合は、いずれも伯爵の爵位をもつ貴族院議員であり、原とは全く異なるわけです。原死後、政友会総裁となった高橋是清(1854-1936)は子爵の爵位を返上して貴族院の議席をすて衆議院総選挙に出馬し、衆議院議員になるわけで、背景には政治的価値観の転換があるわけです。

帝国議会の開院式に臨む天皇陛下の玉座は貴族院本会議場にあり、貴族院と衆議院との間には格差がありました。それをひっくり返し、貴衆両院の位置づけを大きく転換したのが原内閣の成立の政治史的意義なのです。二大政党制も価値観の相違や対立を基礎とするべきで、単なる政策の違いでは、国民もその差異を大きなものとは理解しないのではないのでしょうか。

【田澤】ご高論「戦時体制と戦後体制」では、森戸辰男(1888-1984)、大河内一男(1905-1984)らの戦時体制論の提言が戦後経済において現実化していることを指摘されています。戦後日本の政治経済体制の成立において戦時体制との連続性、また森戸など「大正デモクラシー」の思想と戦時体制との関係性について先生のお考えを伺いたいと存じます。

【三谷】当時の経済学者の戦時体制論は、生産力の増大や社会保障制度の合理化に資する目的合理的な戦時体制を構想することに専心したんじゃないかと思うんです。それを戦後体制につなげようとしたといえるんじゃないかと思います。森戸や大河内以外にも、経済学者、特にマルクス経済学者の場合にはいかにして戦時生産力を増大させるかという課題に目的意識を集中させていたように思われます。だから日中戦争期にいろいろな統制経済方式が編み出されるわけですが、資金の投入をいかに戦時生産力の形成に効率的

に振り向けるかという目的意識をもって作られた臨時資金調整法には、戦後の傾斜生産方式、特定の分野に資源を重点的に振り向けるという方式に連なるものがありました。両者の発想は、軍事と平和というそれぞれの目的は違うけれども手段には共通性があったのではないかと思ったんですね。そういう意味で戦時体制論と戦後復興論との関連性を指摘したいと思っています。経済の場合は戦時と戦後との連続面に着目すれば、そういう風にいえるのではないかと思っています。要するに、どちらの場合も、脱イデオロギー化したマルクス主義（経済政策化したマルクス主義）が大きな影響力をもったといえるのではないかと思います。

森戸の場合、クロボトキン（1842-1921）の社会思想の研究で大学を追われたという「大正デモクラシー」期の典型的なりべラルな学者でもあります。社会経済学者として政策を構想する場合は、多分に来るべき戦後を意識しながら、いかに生産力を増強するかという点に目的意識を集中したのではないかと考えています。

余談になりますが、50年近く前、大学紛争が全国を席捲していたころ、文部省の中央教育審議会に呼ばれて、大学制度の将来について、私見を述べる機会がありました。当時の中教審の会長が森戸先生でした。当時森戸先生は、もちろんご高齢でありましたが、その戦闘者的態度と鋭敏な頭脳の切れには、往年クロボトキン問題をめぐって、平沼騏一郎検事総長（1867-1952）をはじめとする司法部と対決した「大正デモクラット」を彷彿させるものを感じました。

3 「大正デモクラシー」論における吉野作造

【田澤】大山郁夫（1880-1955）、長谷川如是閑（1875-1969）、吉野の学問のなかで、三谷先生は吉野の国内における「民本主義」の国際的な展開に注目し、民主化と脱植民地化という戦後のデモクラシー体制を先駆的に論じていた点で高く評価されています。三谷先生のご研究における政治思想の評価の基準についてより詳しくご教示いただきたいと存じています。

【三谷】政治思想の評価の基準について、これは非常な難問ですが、私が重視するのは現実への衝撃力がどれほどあるか、現実との関連度（relevance）、それから論理性（哲学性・概念的厳密性）、そして先見性（超越性）、つまり現実を超越するものが政治思想には必要ではないかということ、そして普遍性（理念性）です。こういう基準に照らしてみると吉野の「政治思想」は、高い評価を与えることができると考えています。

【田澤】長谷川如是閑などもあてはまりますか。

【三谷】特に吉野にあてはまると思います。吉野の政治思想の射程は長いですが、その時点ではあまり理解されなかった。松尾さんや飯田（泰三）さん（1943-）と編集した『吉野作造選集』〔全15巻・別巻1, 岩波書店, 1995-1996年〕もあまり売れなかったそうですよ。そのことを安江良介さん（元岩波書店社長, 1935-1998）が『信濃毎日新聞』に書いたらいいです²⁾。私が丸山（眞男）先生に対しそのことを手紙で書いたところ、当時先生は非常に弱っておられました。奥さまを通じて、私宛にメッセージを寄せられ、吉野作造がそれほど読まれないということは「現代における知的退廃を象徴するものだ」という激烈なメッセージを下されたんですよ。「将来必ず読まれると信じています」ということでした。

「大正デモクラシー」期の長谷川如是閑の文章には、やはり現実に対する衝撃力があります。また論理性や現実に対する超越性もあります。しかし如是閑の本質は、やはりジャーナリストであり、政治思想家ではないと思います。如是閑にとって最も重要なのは「現実」（それも可視的な「現実」）であって、その「現実」に対する「超越性」には限界があります。如是閑はマルクス（1818-1883）は理解できても、やはりヘーゲル（1770-1831）とは無縁の人だと思います。しかしそれは決して如是閑の文章の評価を貶めるものではありません。

【田澤】丸山は「大正デモクラシー」をあまり評価していないのではないですか。

【三谷】丸山先生は吉野を評価しておられました。「吉野さんは日本政治史の土台を作った初めての人だ」といわれました。それはもちろん学問的評価ですが、「吉野という人に会っておきたかったなあ」としみじみ述懐されたことがありました。大山郁夫の評価にしても、メリアム（1874-1953）のような同時代の最先端のアメリカ政治学を導入したというような学問的評価というよりも、「正義」というような普遍的価値に従って行動したという点を高く評価しておられました。おそらく吉野についても、同様な評価があったと思います。長谷川如是閑が重んじたのは、職人の技術と倫理であり、おそらく吉野や大山のように普遍的な理念に従って行動するような人ではなかったのではないかと思います。

【田澤】三谷先生はアマチュアリズムの徹底化を主張した吉野に対する評価とともに、日本における政党政治を確立させた原敬のプロフェッショナルな手腕への評価を「大正デモクラシー」評価の基軸にしておられます〔三谷「原敬と日本政党政治」『歴史をつくるもの 日本近代史述講』上, 中央公論新社, 2006年〕。政治におけるプロフェッショ

ナリズムとアマチュアリズムとはどのような関係が望ましいのか、三谷先生のお考えをお聞きしたいと存じます。

【三谷】政治にはプロフェッショナル（「職業としての政治」）の側面とアマチュア（「非職業としての政治」）の二つの側面があるわけですが、私は政治史学というものは、単に「職業としての政治」だけではなく、「非職業としての政治」にも注意を払わなければならないと考えています。

具体的にいいますと、職業政治家だけでなく、アマチュアを指導する、職業政治家から独立した政治教育者の活動を視野に入れなければ政治史は成立しないんじゃないかと考えています。福沢諭吉は、日本では最も早く、政治教育者の必要を唱えた人です。『学問のすゝめ』が打ち出した最も重要な命題の一つがそれです。明治期の福沢諭吉、その次は大正期の吉野作造、そして戦後期の丸山眞男が、日本における最も優れた政治教育者の実例です。政治教育者の母胎はジャーナリズムである。そこにジャーナリズムの存在理由がある。プロだけを描いては、政治史はだめなんです。プロだけを見ては、政治の全貌がわからない。プロの質を決定するのは、結局においてアマの質である。アマが政治教育者の指導によって、プロからの独立性や自己組織性をもっていることが政治全体の質に関わります。吉野はそのことを最も正しく認識し、福沢の先例に従った人です。

【田澤】吉野には、南原繁とともに「神の国」実現という価値を社会科学（学問）の基礎においているなど共通性が見られます。キリスト教的理想と社会科学を結びつける論理について、近代の社会科学における役割や意義、限界性、また現代の学問に対する意義についてご教示いただけたらと存じます。〔三谷「南原繁百歳」『近代日本の戦争と政治』岩波書店、1997年など参照。〕

【三谷】社会科学に従事する者は、クリスチャンに限らず、誰でも「神の国」とか「キリスト教的理想」に相当するようなものをもっていなければならないと思うんです。それがなければ、そもそも社会科学の「狭き門」には入れないのではないのでしょうか。それは旅人にとっての「北極星」のようなもので、これがないと社会科学者は方向を見失ってしまいます。「マルクス主義」に限らず、「社会科学」というのは世界観と哲学と科学とが不可分に結びついているものではないかと思います。

【田澤】時代に対する先見性と政治思想との関連性についてはどのようにお考えですか。

【三谷】時代に対する先見性をもつためには、現実を超えたものに対する想像力が必要です。単なる実証的な社会科学は先見性をもたず、現実に対する衝撃力をもたないと思

ます。これは重要なことだと思います。

【田澤】現在の政治学など社会科学の状況についてはいかがお考えですか。

【三谷】現在は「各論」研究が膨大な量に及んでいますが、その渦のなかに巻き込まれてしまっています。今後の政治学界は、各論の渦のなかでどこに向かいつつあるかという方向性を見極めることが必要だと思います。私は学際的な影響力をもつ研究というのは、各論を通じてではなく総論（general theory）的なものを出さないといけないんじゃないかと思います。経済学などもケインズ（1883-1946）の理論があっただけで実際の経済政策に影響を与えるものだと思います。そのためにも世界観と哲学と科学が結びついていることが大事だと思います。法律学などでも同様です。たとえば商法学の田中耕太郎（1890-1974）などは総論をもった人で、そこがあの人の非凡なところだと思います。あの人は世界法の理論を作るわけですが、それは手形法などの各論を通じてなんです。今の実定法学にはそういうのはないですね。

4 「大正デモクラシー」とアジア主義について

【平野】三谷先生は吉野の民本主義論の普遍性に言及したうえで、中国革命および朝鮮論について、「他国のナショナリズムを理解し、尊重し、その中に流れる民本主義と提携すること」〔三谷『大正デモクラシー論——吉野作造の時代』新版、東京大学出版会、1995年、154頁〕と述べておられます。一方、松浦正孝氏（1962-）は『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか——汎アジア主義の政治経済史』〔名古屋大学出版会、2010年〕で、竹内好が石橋湛山（1884-1973）について「自由主義者にしてアジア主義者」〔竹内「わが石橋発見」『竹内好全集』第8巻、筑摩書房、1980年、202頁〕と位置づけたことに触れ、松浦氏はその位置づけが吉野にこそ当てはまるとし、「この指摘は、筆者に対する三谷太一郎氏と北岡伸一氏（1948-）によるものである。」〔884頁〕という注を付けています。

松浦氏に対して三谷先生が北岡氏とともに指摘された「自由主義者にしてアジア主義者」としての吉野像について、具体的な内容をご教示いただけますでしょうか。また、第一次世界大戦期以降の吉野において、①普遍性への志向と、②欧米列強のアジア侵略に抵抗するためにアジア諸民族は日本を盟主として団結するべきだというアジア主義的な考えとは、どのような関係にあったのか、先生のお考えをお聞きしたいと存じます。

【三谷】吉野が明らかに「自由主義」的側面をもち、また独自の「アジア」観をもっていたことは事実です。しかし彼は単なる「自由主義」者ではなかった。つまりキリスト者

として一種の共同体的価値観に立っていた。そういう立場から「自由主義」に対する批判的観点をもっていただ私は見ます。南原繁の「自由主義の批判的考察」〔1928年〕³⁾、これは今読んでも大変立派な論文ですが、それと同じ視点に立っていました。当時は田中義一内閣で、政党内閣がこれで消え去るということを誰も考えていない時期に書かれたものです。

松浦さんの『「大東亜戦争」はなぜ起きたのか』では、南京攻略軍の総指揮官の松井石根(1878-1948)がキーパーソンとなっています。吉野は松井のような「地域主義」的な、あるいは「地政学」的な「アジア主義者」では全くなかった。吉野の「アジア」とは、普遍的な理念を共有する「民本主義アジア」です。彼には日本を盟主とするアジア共同体観念はなかったと私は見ます。彼はアジアにおける日本のあり方に終始批判的でした。そこが単なる「アジア主義者」と違うのです。「民本主義アジア」にとってそれは否定的媒介の役割を担っていました。1920年代から30年代にかけての日本の政治的現状に対する吉野の透徹した批判から日本を盟主とする「アジア主義」は出てこない。吉野の場合、日中提携は中国の独立が保障されてはじめて提携が成り立つということで、松井とは異なっています。

【田澤】吉野の共同体的価値観とはどのようなものでしょうか。

【三谷】キリスト教的な価値観で重要なのは、個人主義とは違っており、教会を原型とした信仰を媒介とする共同体的価値観が根底にある。国民共同体とは違いますが。

【平野】吉野をアジア主義者と位置づけることはできるでしょうか。

【三谷】率直に言って、そのようなことをいった記憶がないですね。私はその注記には違和感を覚えました。

【平野】石橋湛山はどうでしょうか。

【三谷】まだわかりませんが、石橋はアジア主義者というよりは、日蓮のような意味の民族主義者、ナショナリストではないかと思います。彼がアジア主義者であるとすれば、民族主義的アジア主義者であると思います。

【田澤】吉野は個人主義ではないのでしょうか。

【三谷】キリスト教徒と個人主義者とは違うと思います。吉野と丸山先生とはそういう点が大きく違います。吉野には教会がありますが、丸山先生にはありません。南原先生は無教会ですが、「神の国」の存在を信じていました。丸山先生は「道」を求めた人ですが、「道」を得られなかった人です。それが南原先生と丸山先生との違いでもあります。

【藤村】吉野は東アジア重視という点ではある種のアジア主義といってよいでしょうか。

【三谷】そうですね、アジア重視という点はその通りです。私は日韓の歴史共同研究委員会に日本側座長として参加した際、韓国側座長に対して吉野と学問のうえて関係があるといったところ、韓国側座長を務めた学者の態度が変わりました。吉野はアジアのために尽くした人だというんですよ。非常に尊敬されていました。そこで私は岩波版の『吉野作造選集』を一揃い韓国に送りました。吉野のような人は、真の意味で日本の「国益」に尽くしたといえる人で、吉野が百年近く前に、日本国内では「国賊」呼ばわりの悪罵中傷を浴びながら、いったり、書いたりしたことが今日の日韓関係に貢献しているのです。人間の真価というのは歴史の評価を経て現れるといえるのではないのでしょうか。

アフリカのチュニジアから日本に留学している人が私を突然訪ねてきたことがあり、「アフリカには吉野のような人はいない」というのです。「吉野の業績を国の人々に伝え、広めたい」というのです。もっともチュニジアの現状では、はたして吉野の言説が浸透するかどうかはわかりませんが、私はそれをチュニジアのために願っています。「あなたのお国でどんな日本人が知られているか」と聞いたところ、「福沢諭吉はよく知られている」ということでしたが、それ以外は知られていないということでした。

5 吉野作造のナショナリズムについて

【田澤】「国家的価値に対する非国家的価値の自立性」という「大正デモクラシー」状況における吉野のナショナリズムはどのようにとらえられるか、先生のご見解を伺えれば幸いです。またそれは南原繁のナショナリズムと関連するのかどうか、お聞きできれば幸いです。

【三谷】吉野のナショナリズム観は、それをヨーロッパにおけるナポレオン戦争以後のウィーン体制解体の一つの現れとしてとらえていました〔吉野作造講義録研究会編『吉野作造政治史講義——矢内原忠雄・赤松克麿・岡義武ノート』岩波書店、2016年〕。アジア国際政治の観点からだけでなく、ヨーロッパ国際政治の観点から、世界的な文脈で同時代の「ナショナリズム」を見ていたように思います。吉野が重視した中国ナショナリズムについても同じです。南原の「ナショナリズム」には「国民共同体」を「神の国」につらなる永遠の秩序を構成する不可欠の要素としてとらえる価値観がありました。

6 アメリカニズムの日本への影響

【平野】細谷千博（1920-2011）・斎藤眞（1921-2008）らの「ワシントン体制論」〔細谷・斎藤編『ワシントン体制と日米関係』東京大学出版会、1978年、細谷編『日米関係通史』東京大学出版会、1995年〕と、大正日本や吉野へのアメリカニズムの影響という三谷先生のご構想とが関連しているのではないかと推察されますが、この「ワシントン体制論」に対する先生のご認識についてお聞かせください。

また、ご高論「ワシントン体制と日米関係——国際的文脈における大正デモクラシー」〔三谷『ウォール・ストリートと極東——政治における国際金融資本』東京大学出版会、2009年〕で、「大正デモクラシー」はアメリカン・デモクラシーの一つの現れとされ、国際的にはウィルソン主義がワシントン体制の形成要因の一つであり、この点では吉野はウィルソン主義者とされています。吉野の議論には日中提携論があり、その点で吉野にはワシントン体制に対する批判的側面があるのではないかと思います。中国論を視野に入れた場合の吉野の構想についてお考えをお聞きしたいと存じます。

【三谷】ウィルソン主義には、本来日中提携論があります。私の「大正デモクラシー」概念の一つの特徴は、それを第一次大戦後の世界的なアメリカニゼーション、単に政治的なものに限らず、経済的、文化的なものを含めたアメリカニゼーションの日本における一つの現れとしてとらえることが必要なんじゃないかという考えから発しています。つまり「大正デモクラシー」というのは単に日本に限定されたローカルな現象ではなく、同じ時代の世界の大きな動き、今でいうと冷戦後のグローバリゼーションに相当するような動きを伴った現象ととらえるわけです。

したがって「大正デモクラシー」の「デモクラシー」はアメリカ英語であると理解します。アメリカニズムを抜きにして「大正デモクラシー」を考えることは出来ないと考えています。これは「大正デモクラシー」研究者に広く受け入れられているとはいえなと思いますけれども。

それを前提として「ワシントン体制」もまた、政治的、経済的なアメリカニゼーションの影響の下に成立したと見ています。つまりアメリカニゼーションというものがなければ「ワシントン体制」は成立しなかったのではないかと思います。この点は私の書いた『ウォール・ストリートと極東』をお読みいただければわかると思います。

【平野】国際金融資本の研究をされた発端はどのようなものですか。

【三谷】私が国際金融資本研究など経済研究を行ったのは、岡先生の影響もあります。岡

先生は信夫清三郎の『近代日本外交史』〔中央公論社、1942年〕を、その政治経済学的視点の故に高く評価されていました。刊行後まもなく、『国家学会雑誌』に書評をお書きになりました〔岡義武「近代日本政治史に関する近著二つ」『国家学会雑誌』第57巻第3号、1943年3月〕。

本格的に国際金融資本の研究を行ったのは、1969年から71年にかけて、アメリカに赴き、ハーヴァード・ビジネス・スクールの文書館で当時公開されたばかりのモルガン商会のトーマス・ラモント（1870-1948）の関係資料を時間をかけて筆写したのがきっかけです。そこで一緒だったのが同志社大学の麻田貞雄さん（1936-）です。英語の達人の麻田さんは短時間で要領よく見終わりましたが、私はひとつひとつ筆写しました。（当時はコピーの機械は使うことを許されませんでした。）

【平野】ワシントン体制を吉野はどのように見ていたとお考えですか。

【三谷】吉野はワシントン体制を否定したのではなく、ワシントン体制下での日中提携を支持したのであって、ワシントン体制と日中提携は両立し得ると考えていたと思われます。この点は、ウィルソンの米中提携論と同じだと思います。現に、当時の中国もまた、九カ国条約の調印国であり、ワシントン体制の構成国でありました。もちろんワシントン体制構成国のなかでも立場の違いがあり、たとえば中国ナショナリズムに対する政策・態度は一様ではなかったのですが、日本は他の諸国に比べれば、中国ナショナリズムに対してより敵対的であったのであり、日本と英米両国とは結局において中国ナショナリズムに対する政策・態度において不一致点が解消されず、国際協調が成り立たなかったということなのです。

【田澤】日米英の協調体制が成立していれば、アジア・太平洋戦争は生じなかったのでしょうか。

【三谷】イギリスも中国には莫大な権益をもっていたわけで中国ナショナリズムには脅威感をもっており、一時期は日本と帝国主義的立場から協調をすることも考えたんですけども、結局それを行わず、アメリカと協調し中国ナショナリズムに対して妥協する態度をとった、その点が日本と違うわけです。日本はもちろん英米との国際協調については維持したいと考えたと思いますが、中国ナショナリズムに対し終始敵対していた、それが張作霖爆殺事件から満州事変へと日本を導いていった、そのような政策が英米と違っていたことがその後の英米との国際協調を阻み、アジア・太平洋戦争への道を準備したと思います。

（南京攻略を指揮した）松井石根は張作霖爆殺事件と非常に深く関わっているんです。

陰謀を計画した関東軍高級参謀河本大作大佐（1883-1955）は、参謀本部の首脳にあてて、張作霖爆殺事件を事前に予告し、いずれ事件を起こすということを連絡していたんです。その連絡先が作戦部長（第一部長）荒木貞夫中将（1877-1966）と情報部長（第二部長）松井石根中将なんです。なぜそういうことをやったかという、南満州の支配者を張作霖（1875-1928）よりも、関東軍にとって、より操縦しやすい人物にかえることを計画していました。つまり張作霖よりも操縦しやすい人物を拉致し、張作霖とすげかえようとしたのが満州国の皇帝となる溥儀（1906-1967）擁立工作なんです。3年後に実行されるシナリオが既に描かれていたんです。張作霖が不十分ながら体现していた中国ナショナリズムを抹殺したのが張作霖爆殺事件ということになるわけです。

【平野】三谷先生のご研究の特徴はアメリカニズムの重視にあると思いますが、先生ご自身のお考えについてお聞かせください。

【三谷】アメリカニズムは私の「大正デモクラシー」研究の重要な特徴です。もう一つは、デモクラシー、民主制というのは権力の一つの形態だということを重視する点が、ほかの「大正デモクラシー」研究者との大きな違いになっていると思います。アリストテレス（前384-前322）以来、西欧の政治思想は民主制を権力の一形態として位置づけています。民主制を権力の一形態としてとらえる政治学の伝統を踏襲すべきだというのが私の考えです。権力の形態として民主制をとらえないと、権力としての民主制への批判が成り立たなくなってしまうからです。それは民主制を「神聖不可侵」とすることになり、「民主制」を腐敗させます。民主制も批判の対象としてとらえる必要があるというのが、政治学の伝統を重視する私の考え方です。民主制に対する批判がなければ、丸山真男という民主主義は永久革命であるというテーゼも成り立たない、「大正デモクラシー」を体制・運動の両側面からとらえて、全体として民主制とはどういう権力なのかを明らかにすることが必要だと考えています。

【田澤】丸山の「開国」論〔「開国」『講座現代倫理11 転換期の倫理思想（日本）』筑摩書房、1959年〕との関係はありますか。

【三谷】「大正デモクラシー」期も第二の開国の時代として考えることができる。アメリカニズムを日本の内政にまで及ぼすインパクトをもったものだと見るのが重要であると思います。

7 蠟山政道の政治学の評価について

【平野】ご高論「日本の政治学のアイデンティティを求めて——蠟山政道の政治学の模索」〔三谷『学問は現実に関わるか』東京大学出版会、2013年〕では、政治学の学問的自立性を追求した蠟山政道（1895-1980）の「近代政治学」が「デモクラシー」の危機を経て「現代政治学」へと「挫折」する過程を論じておられます。蠟山政治学を「デモクラシー」の危機に対応する政治学ととらえた場合、現代に生かすべきものがありましたらご教示ください。

【三谷】蠟山政道先生には何回かお会いしたことがあり、立派な先生であることは間違いありません。蠟山先生は第一次世界大戦の戦後世代の気鋭の政治学者なのです。蠟山先生が最初に一番傾倒したのは、吉野というより大山郁夫ですよ。旧制一高の時代に大山邸を訪ねて懇談を申し入れたことがあるというくらい、傾倒していたんです。大山郁夫には『政治の社会的基礎——国家権力を中心とする社会闘争の政治学的考察』〔同人社書店、1923年〕という著作があります。蠟山先生は状況の変化を非常に鋭敏にとらえる人で、大山に倣って第一次世界大戦後は国内政治のみならず、国際政治においても、社会的基礎の研究が必要だということをいったんです。有名な『政治学の任務と対象——政治学理論の批判的研究』〔巖松堂書店、1925年〕に出てきますが、「国際社会」という概念が初めて登場するのは、国際政治の社会的基礎の研究の必要を認識されたことに由来します。私の見た限り蠟山先生の本が「国際社会」という概念の定立を唱えた初めての例です。その前は国際社会という概念はなかったんです。そこで国際社会の社会学的アプローチが必要だといったのは非常な卓見であり、今の国際社会というのはいくつかの国家が集まって漠然とグループを作っているというものですが、それとはっきり違う概念を提出した点で重要な提言だと思います。国際政治を主権国家以外の構成要因に着目し、社会学的アプローチによって研究すべきだと主張されました。そういういい発想をもっていたわけですが、それを完成に導いたとはいえない。今後の国際政治研究にとっても、国家、人種、民族ではなく労働組合などのような派生物に着目することが必要だという点の指摘は画期的で卓見だと思います。ただ、政治学において最先端を追求したわけだけども、それが現実に対する衝撃力をもちえなかった、そのような形に結実しなかったのです。

【田澤】吉野と蠟山の違いはどこにありますか。

【三谷】率直に言えば、やはり自分の学問を導く「北極星」をもっていなかったというの

が、蠟山先生の学問の最大の問題だと思います。それは蠟山先生だけでなく、いわゆる実証主義政治学に共通する問題だとも思います。ローズヴェルト大統領のニューディール政策とナチス・ドイツの経済政策との関連を指摘するなど、蠟山先生の政治学には、優れたジャーナリストに時折見られる現実の動向を瞬間に感得する独自の鋭敏さはたしかにあります。

なお蠟山先生は、私のうかがい知るところでは、佐藤一斎（1772-1859）の『言志四録』に親しまれ、それから人生の指針を引き出しておられたように思われますが、それは「北極星」とは意味が違うのではないかと思います。

【田澤】先生の国際政治的観点は斎藤真からの影響ですか。

【三谷】斎藤先生を私は大変尊敬しています。斎藤先生はクリスチャンというだけではなく、「北極星」をもっている人だったと思います。それは現にいる自分を超越すること、自己超越ができるということです。蠟山先生にはそれがなかったのではないかと思います。

【平野】戦後の蠟山とはどのようなお話をされましたか。

【三谷】私は1969年7月に河口湖畔で開かれた日米関係史（1931～41年）の国際共同研究会議に参加し、そのためのペーパーとして提出したもので蠟山先生の批判を行いました。そのときに初めてお会いしました。若いときですから、先生とお話ししても、それでたじろぐこともなかったのです。それは若さが時折露呈する酷薄さです。それを今は深く反省しています。ふり返ってみると、先生は人間として、実に穏和で、寛容な君子人でした。河合栄治郎事件で、先生は親友河合教授（1891-1944）と運命を共にし、大学を辞されました。以後先生は戦中から戦後にかけて、筆舌に尽くしがたい人生の辛酸と浮沈を経られたわけです。

1969年の日米関係史国際会議から5年後、私は蠟山先生をはじめ、中山伊知郎（1898-1980）、松本重治（1899-1989）の3人の先生方を選考委員とする委員会の推薦により、『大正デモクラシー論——吉野作造の時代とその後』（中央公論社、1974年）によって吉野作造賞を受賞しました。授賞式当日、選考委員を代表して推薦の辞を述べくださったのが蠟山先生でした。

【平野】ご高論「主体性を欠いた歴史認識の帰結は何か」（『世界』2015年10月号）などで、歴史認識をめぐる政治指導者の主体性の欠如を批判しておられます。そこには、現政権〔安倍晋三政権〕が歴史についての主体的判断を委ねることを躊躇しない「専門家支配」の暴走への懸念があると思います。ここで例として蠟山が提言した「立憲的独裁」

の概念を挙げておられますが、吉野以後の専門学者と権力との関係を三谷先生はどのように評価されますか。

【三谷】 私は1930年代に蠟山が唱えた「立憲的独裁」という概念というのは、専門家支配がその実体だと思えます。今の政権が依拠しているのも専門家支配ですが、それは結局政権をも「専門家」をも劣化させる恐れがあります。政権に寄生する「専門家」は批判的役割をもたないからです。

8 「大正デモクラシー」と丸山眞男について

【田澤】 ご高論「わが青春の丸山体験」では、丸山の『現代政治の思想と行動』〔上下巻、未来社、1956-57年〕を「戦後日本が生んだ最も独創的で最も普遍的な知の啓示」〔三谷『学問は現実に関わるか』43頁〕とし、大きな知的刺激を受けたと述懐されています。この書が三谷先生のご研究に与えた影響はどのような点でしょうか。

【三谷】 丸山先生は私が決定的な影響を受けた先生であり、ちょうど大学に入った年〔1956年〕の秋に『現代政治の思想と行動』上巻が出て、あれがなかったら私は政治学者にならなかったと思えます。そのとき一番強い感銘を受けたのは、政治が学問的認識の対象になり得ることを教えられたということです。政治学の学問的可能性の示唆は、若い学生にとっては存在の根底を揺るがすような衝撃でした。政治を客観的に認識することは不可能だと思っていましたので、丸山先生の『『スターリン批判』の批判——政治の認識論をめぐる若干の問題』〔『世界』1956年11月号、後に『『スターリン批判』における政治の論理』と改題され、『現代政治の思想と行動』下巻所収〕は衝撃的だったです。

丸山先生が「大正デモクラシー」に対する評価がマルクス主義評価に比べて低かったというのは、話を聞いて感じました。丸山眞男の基底的価値観はマルクス主義にあったといえるかも知れない、と感じます。丸山先生は西洋人の学者や思想家のなかで「本当に読んだといえるのは、マルクスとカール・シュミット（1888-1985）かも知れない」とおっしゃったんです。晩年先生はヨーロッパに行かれたとき、「カール・シュミットが元気だから紹介する」と友人にいわれたのに、どうしてもひるんでしまった、ということです。

【田澤】 丸山がマルクスやカール・シュミットを読んだ時期はいつでしょうか。

【三谷】 マルクスは学生時代から読まれたんですね。その理解は抜群でした。私とは全然違うなあと思いましたね。講義でというよりも、あの先生は雑談が面白く、「忙しい」と

いいながらよく雑談をしていました、私はそこから学んだ点が大きいです。私は先生に「ぜひカール・シュミットで本を書いてください」といいましたが、「いやあ」といっていません。

1989年にベルリンの壁が崩壊したとき、「先生、この問題はどうですか」と丸山先生に聞いたところ、先生は「僕はなぜ共産主義国家体制に対するちゃんとした批判をしなかったのか、あれは僕らの世代の責任だ」といわれたんです。私はそういう自己批判を引き出すつもりはなかったので恐縮してしまいました。先生はプラハの春〔1968年〕のときソ連批判〔丸山・中野好夫・久野収「チェコ占領に強く抗議する」『朝日新聞』1968年8月25日〕をやっていますし、天安門事件の際も中国批判をやりました。先生が共産主義政治体制批判をやらなかった責任があるとは思わなかったんです。政治学者として終わりを全うすることの難しさを感じました。

丸山先生は市民運動よりも現実の政局に対する関心が大変強かったんですね。60年安保の際も、三木武夫（1907-1988）を通じて反岸派によって自民党をいかに分裂させるかということをも真面目に考えていたんです。ですから鶴見俊輔さん（1922-2015）のような市民運動のリーダーとは感覚が違うんじゃないかと思います。

【田澤】三谷先生は政治活動をなされますか。

【三谷】私にはそのような感覚も力もないですよ（笑）。

【田澤】安保闘争をいま振り返ってみてどのようにお考えですか。

【三谷】国会議事堂の前によくデモ行進で行きましたね。民主主義を真面目に考えました。研究室に朝来て本を読んでいると、丸山先生が入ってきて、「今日午後デモがあるんだが一緒に行かないか」といわれ、本当は行きたくなかったんだけど（笑）、一緒に行きました。あの頃の法学部は自由な雰囲気があって、助手室によく先生たちが入ってきて雑談しました。大学紛争後は少し変わり、先生たちとの間にバリアを感じるようになりました。それまでは研究会をやっても、若い人が発言するのに抵抗感はありませんでした。南原先生もテーマによっては出てこられました。

【平野】三谷先生は「歴史としての戦争と記憶としての戦争」〔三谷『戦後民主主義をどう生きるか』東京大学出版会、2016年〕をお書きになっていますが、敗戦のときの体験について改めてお聞かせください。

【三谷】ちょうど国民学校3年生のときですが、国民の努力が足りなかったという新聞に出た日本政治会総裁の南次郎（1874-1955）の談話に憤りを感じたのですが、それをどうして記憶しているのか不思議です。私は岡山市にあった家が戦災に会い、父親の郷里で

ある岡山県の農村に疎開し敗戦を迎えたのですが、農村に生活して感じたのは都市と比較しての貧しさですね。大きな格差があると感じました。ラジオや新聞がほとんど普及していないんですね。その後東京に出て、また岡山に戻ってきていました。父は当時商工省やその後身である軍需省の岸信介（1897-1987）の下で行政官をしていました。石橋湛山は戦中よく商工省に嘆願に来ていたそうです。父にとって岸と石橋の位置づけはかなり違っていました。やはり官僚の感覚なんだなと感じていました。商工省には吉野作造の実弟吉野信次（1888-1971）や吉野が引立てた木戸幸一（1889-1977）や岸信介のような経済統制派の系統と、岡先生のお父さん、工場法の制定に携わった岡実（1873-1939）のような開明派の系統の二つの系列があって、両者は全然違っていました。私は、他の友人たちと共に毎年多摩墓地にある吉野作造の墓参に行くのですが、吉野作造の墓とならんで弟の吉野信次の墓があります。井上ひさし（1934-2010）の戯曲「兄おとうと」を思い起こしています。（以上）

〔付記〕 インタビュー日：2016年11月4日

場所：明治新聞雑誌文庫内応接室

本文作成にあたり科学研究費（「大正デモクラシー」の総合的研究，基盤研究C，平成29～平成32年度）の助成を受けた。

注

- 1) 三谷太郎「あとがき」『大正デモクラシー論——吉野作造の時代とその後』中央公論社，1974年（初版）。『大正デモクラシー論——吉野作造の時代 新版』（東京大学出版会，1995年）以降，第3版（東京大学出版会，2013年）に「旧版あとがき」として掲載されている。
- 2) 三谷太郎『戦後民主主義をどう生きるか』（東京大学出版会，2016年）によれば，「『信濃毎日新聞』1995年7月1日付」の記事である。
- 3) 初出の題名は「政治原理としての自由主義の考察」（『国家学会雑誌』第42巻第10号，1928年10月）。後に「自由主義の批判的考察」と改題され，南原繁『自由と国家の理念——政治哲学論文集』（青林書院，1959年）所収。

